

# 朴花城の長篇小説『白花』について

山田佳子

A Study of Park Hwa Sung's *Baekhwa*

Yamada, Yoshiko

## 〔目次〕

はじめに

### I 『白花』の構成

- 1 時代背景
- 2 主な登場人物
- 3 展開

### II 『白花』の主題

### III 『白花』の位置づけ

おわりに

## はじめに

朴花城の長篇小説『白花』は1932年6月から180回にわたって『東亜日報』に連載された、朝鮮の女性作家では初めての新聞連載小説である。朴花城は1925年1月に李光洙の推薦で「秋夕前夜」を発表して登壇したのち、翌年に日本女子大学英文学部に入学し、1931年に帰国するまでの間は作品発表を行っていない。したがって『白花』は1932年5月の短篇「下水道工事」に続き、3番目に発表した作品である。ただし朴花城は『白花』を日本女子大学在学中に書き始め、連載が始まる前に完成させているため、実際は2番目の作品ということになる。当時、『東亜日報』は李光洙が編集局長を務めており、『白花』もまた、李光洙の推薦によって連載が決まった。李光洙は、読者の反響は期待を上回り、連載は成功だったと1934年に出版された単行本『白花』の巻頭で述べている。

『白花』は歴史小説であり、リアリズムを主

体とする朴花城の作品群の中では異質である。そのため朴花城の執筆活動の基礎が東京留学中に築かれたとする見方がされながらも、大作『白花』の本格的な研究はこれまでほとんどなされていない。そこで本稿では『白花』を概観したのち、朴花城の植民地期の作品の中における位置づけについて考え、今後の研究の基礎としたい。現在、『白花』は2004年にブルン思想社より刊行された『朴花城文学全集』に収録されているが、2007年には単行本『白花』の影印本が同じ出版社より刊行された。本稿ではこの影印本をテキストとする。

## I 『白花』の構成

### 1 時代背景

『白花』は高麗時代末期、すなわち31代恭愍王から辛禑、辛昌を経て、高麗最後の王である34代恭讓王が讓位し、李成桂によって儒教を統治理念とする朝鮮王朝が開かれるまでの時期を背景としている。この時期の高麗は、元から明への中国の王朝交代に伴う混乱の影響を受け、北からは紅巾賊に侵入され、また南は倭寇に脅かされるなど、対外的に多くの難題を抱えていた。『白花』ではこうした「外患」に加え、「内患」として「宦官嬖臣」と「妖僧詐仏」を挙げ、「国王は失政百出、逆謀権臣が国権を専恣、加えて妖僧が宮殿内外を濁乱するとあってはどうして国が揺るがずにいられようか<sup>1)</sup>」と、国王と役人の腐敗、僧の墮落が国家に危機を招いた

のだと作品の冒頭で指摘する。

高麗王朝第32代辛禰と33代辛昌は、一説では恭愍王の腹心、僧辛吨の子孫だとされて辛の姓が用いられるが、『白花』においても同様であり、彼らは一貫して悪役を担っている。すなわち恭愍王の夢枕に現れて命を救ったという理由で官職に上った辛吨は、王の信頼を得て政治を牛耳るのみならず、姦通を常とし、自らが妾に産ませた子を世子のいない恭愍王の子として提供した。それが禍だとしている。『白花』ではさらに、子宝祈願に訪れる婦女と姦通を繰り返す僧、媒仏善者をめぐるエピソードに一つの独立した物語とも言えるほどの力と分量が注がれており、作家の問題意識の高さがうかがわれる。これについては後で述べる。

媒仏善者は架空の人物であるが、歴代の王をはじめ、実在した人物としては王朝交代期に李成桂の五男、李芳遠（のちの朝鮮王朝第3代太宗王）によって殺害された鄭夢周が、主人公白花の亡父の親友という設定で登場する。高麗王朝末期は政治的立場では親元派と親明派に二分されるが、中には鄭夢周のように明を支持しながらも李成桂の革命を善しとせず、あくまで腐敗した高麗王朝の再建を目指す者がいた。『白花』ではこの鄭夢周を肯定的人物として描き、その死に高麗王朝の終焉を重ねている。

## 2 主な登場人物

### (1) 白花と王瑞龍

『白花』の主人公白花の本名は林一珠で、清廉な儒者、林敬範の一人娘である。林敬範は恭愍王の治世に一時は官職に就いていたが、国権を恣にする「逆謀権臣」によって駆逐され、松嶽山の山奥に隠居して弟子たちに学問を教えていた。白花の母は白花が2歳のときに死亡したため、白花はこの父の手で育てられ、学問を学んだ。

林敬範の弟子の一人に王瑞龍がいた。瑞龍は高麗王朝第28代忠恵王の孫に当たるが、忠恵王は失脚し、その息子すなわち瑞龍の父、王承信と、さらに母も早くに死亡したため、瑞龍は母方の伯父の親友である林敬範に引き取られた。こうして白花と瑞龍は幼い頃から一緒に育ち、机を並べて勉強した。

ある日、林敬範は二人に互いの名前の一字、「龍」と「珠」を入れた詩を作らせ、交互に詠ませる。詩の中で龍と珠は自ずと一対を成した。それは、辛吨が政治を恣にすることに目をつぶれず、恭愍王に辛吨の弾劾文を送っていた林敬範が、自らの運命を予測し、白花の将来を瑞龍に託そうとの思いから仕掛けたことであった。瑞龍はそれを感じ取っていた。

林敬範は処刑される。そして混乱の中で白花の行方までわからなくなってしまうと、瑞龍も姿を消す。このとき白花は9歳、瑞龍は10歳であった。

### (2) 黄婆

林敬範は捕えにきた役人に引きずられて村を出て行くとき、ちょうど通りかかった顔なじみの商人、黄婆に白花のことを託す。黄婆はもともと売れっ子の妓生であったが、次第に金の虜となり、引退してからは商人を装って若い女性を物色していた。こうして一珠を白花という名の妓生にした黄婆は、白花の価値を高めるために典華堂という弦楽の名人を師匠につける。そして白花は「沈浮思」というコムゴの楽曲を伝授される。

評判の妓生となった白花は恭愍王、辛吨、そして黄婆に対する強い恨みとともに、行方の知れない瑞龍への切実な思いから、体を許す相手だけは自らが決めることを黄婆に約束させる。そして客を迎える部屋に、瑞龍と詠み合った対の詩の一片のみが書かれていて、後ろが空白になった掛け軸を掛け、その空白を埋めることのできる人物を待っている。

その後、禍が王位に就いたとき、黄婆は王命によって殺される。白花の仇を返してやることで歓心を買おうという禍の策略であった。

### (3) 草玉

草玉は全州の豪商の一人娘として生まれた。しかし母の死後、継母によって虐待され、父も死亡すると、その財産を使い尽くした継母の間男の差し金で売り飛ばされ、さらに転売されて最後に黄婆のもとへ送られた。白花と草玉は互いの境遇を同情し、姉妹同然の生活を送る。その間、白花は北高麗随一の富豪キムによって犯

されそうになるが、力尽くで難を逃れる。一方、草玉はキムの息子と、父を役人に持つ2人の不良青年の、合わせて3人によって輪姦される。草玉は死を口にしますが、白花に励まされ、それからは生死をともにすることを誓い合う。

#### (4) ムンイル、ムンチル、コサム

黄婆の家の下男ムンイルは、元は富豪キムの小作人であったが、ある凶作の年に田畑に加えて家と土地まで奪われた。キムはさらに、ムンイルの弟のムンチルの娘を妾に入れることを要求してくる。ムンイルは葛藤の末、それを聞き入れて、金と田畑や山のほか、ムンチルの行商の資金を受け取る。しかし2ヵ月後、ムンチルの娘は性病にかかって追い出され、兄弟は再び全てを失った。

ムンチルの友人であるコサムは妻の死後、娘のムニョンを育て上げ、婚養子を迎えた。しかしその婚礼の日の晩に家が火事となり、ムニョンの行方がわからなくなった。隣に住む役人の放蕩息子、トチュンが家に火をつけ、以前から狙っていたムニョンを連れ去り、大勢で強姦したのであった。自暴自棄に陥ったコサムは各地を放浪していたとき、海州で妓生となっていたムニョンに再会する。

ムンチルとコサムはある日、偶然にキムの息子とトチュンに出会い、コサムが二人を斬殺し、復讐を遂げる。この二人は草玉の輪姦にも関わっていた。また、富豪キムも白花襲撃に失敗した後、狂うようにして死んでしまっていた。

#### (5) ヨサン

媒仏善者をめぐる話の中に初めて登場し、そこから結末にかけて大きな役割を担う人物である。ムンチルの行商仲間であるが、船主だった父のもとで養われた体力を誇るとともに、暇があれば読書をする、知と体を併せ持つ人物という設定になっている。妻を早くに亡くしたため若い後妻をとるが、その妻が子宝祈願に訪れた寺で媒仏善者に犯される。それ以来、妻は性の虜となって媒仏善者と姦通を繰り返す。

一方、ヨサンの母は宿屋を営んでおり、ある日、ヨサンが行商から帰ってみると、旅の途中で病気になった若者が泊まっていた。それは瑞

龍であった。ヨサンの妻は若くて美男の瑞龍に惹かれていく。

その間、ヨサンの母は媒仏善者の指示でヨサンの妻に毒殺され、媒仏善者はさらにヨサンも毒殺するよう指示していた。しかしヨサンの妻は、瑞龍に嫉妬して逆上した媒仏善者から自分と瑞龍を殺すと脅され、先に媒仏善者を刺し殺す。そして自らも服毒自殺する。

こうした悲劇の中で、ヨサンは瑞龍に媒仏善者の悪行を発端とするそれまでの出来事の一部始終を打ち明け、今後の自分の人生を瑞龍に託したいと申し出る。そしてムンチル、コサムも加わり、瑞龍に伴って出発する。

### 3 展開

大方察しがつくように、『白花』は瑞龍と白花が再会を遂げるまでの波乱万丈を描いた物語である。白花が王命に背いて貞節を守り続けることは定石どおりである。ただし瑞龍は李夢龍<sup>2</sup>とは違い、出世して現れて権力によって白花を救い出すのではない。

瑞龍は林敬範の死後、白花を捜してさまよっているとき、金剛山で典華楽という管楽の名人に出会って弟子入りした。そして短簫の「沈浮思」を伝授された。この曲と、掛け軸によって二人は10年ぶりに再会を果たす。しかし一珠が妓生、白花となったことを知った瑞龍は再び去っていく。ただしこれも『無情<sup>3</sup>』の亭植とは違い、当代随一の妓生を救い出す財力がないという理由である。そのため瑞龍は伯父の援助を求めることを決め、端午の日までに戻ると約束して白花のもとを去るのである。

その間、白花は禍王の寵愛を受ける運命となり、最大の危機を迎えるのであるが、端午の日までという約束で興入れを引き延ばす。そしてその日が近付くと、下男ムンイルに手紙を託し、瑞龍のやって来る方向へ迎えに出す。端午の日、白花は王を舟遊びに誘い出し、最後の瞬間には草玉とともに水に飛び込む覚悟であった。

一方の瑞龍は道中で病気にかかり、ヨサンの宿屋に滞在していた。そこで媒仏善者の悪行を知り、また、ヨサン、ムンチル、コサムという仲間を得る。出発した一行は途中でムンイルに出会って白花の危機を知り、馬を借りて駆けつ

ける。しかしそれは白花と草玉が水に飛び込んだ瞬間であった。そしてそれを見た瑞龍も飛び込む。3人はムニル、ムンチル、ヨサンの連携プレーによって救出されるが、このとき中心的役割を果たすのがヨサンである。ヨサンの存在感がクローズアップされる場面である。

このあと一行は船で逃亡し、海州で妓生をしているコサム、ムニオンを引き取り、そこで皆で住まいを構える。そして白花と瑞龍に加え、草玉とヨサン、さらにムンチルとムニオンが結ばれる。

時代はまさに高麗王朝から朝鮮王朝への転換期を迎えていた。瑞龍は伯父が鄭夢周と親しかった関係で一時官職に就き、ムンチル、コサム、ヨサンも登用された。しかし鄭夢周の死によって身の危険を感じると、一行は再びどこかへ去って行った。

次の舞台は東海岸の江原道襄陽へ移る。そこで男女7、8人が農作業をし、それを亭から眺める2人の白髪の老人がいる。そしてしばらく男女の歌が続いたかと思うと、季節が巡り、歳月が流れ、さらに十数年後、旅人らしき男女が現れ、短簫と歌の音色を残し、雲の中へ消えていく。

## II 『白花』の主題

『白花』の結末部分に現われる白髪の老人は、白花と瑞龍が「沈浮思」を伝授された師匠であるらしいことが読み取れる。農作業をする男女は彼らの弟子、すなわち白花と瑞龍とその一行のようである。「沈浮思」の詩は連載の7回分を占めたほどの長篇である。この「沈浮思」と、白花と瑞龍が詠み合った詩の存在、さらに、古典小説を思わせるような結末が、『白花』をきわめて文芸的な色彩の濃い作品に創り上げている。少女時代の朴花城は詩人を志したこともあり、そうした自身の憧れが込められているのかもしれない。あるいは女性読者を意識してのこととも考えられる。

「沈浮思」は朴花城が兄、済民の手を借りながら創作したものだという<sup>4</sup>。作品中ではその由来を「漢の光武帝の時代に奇谷山中に暮らす一人の賢者が」、「人間の歴史の治乱盛衰の意味を後世の人々に伝え遺そうと<sup>5</sup>」詠んだものだ

と説明しているが、内容は忠義あり、背徳あり、血を流す民あり、黄金に目がくらんだ者ありの、善と悪、忠義と不義が二項対立する『白花』の主題そのもの<sup>6</sup>である。「沈浮思」は単に作品に風流感を漂わせるためだけではなく、主題をより明確にする目的で挿入されているのである。

また、朴花城は「白花を据えるにふさわしい歴史的背景」を決めるにあたっても兄の助言を受けたとしている<sup>7</sup>。これは『白花』の連載終了後、雑誌のゴシップ記事で『白花』は朴花城の作品ではないと中傷されたことに反論する中で明かされたものであるが、重要なのは兄の助言云々ではなく、先に確固たる主題があり、それを高麗末期の乱世の時代に当てはめたということである。その主題とは何か。

朴花城は先のゴシップ記事への反論の中で、「少なくとも階級の見地から、或いはせめて文芸の見地から思想の傾向や技巧の優劣を正当に批判しようという文芸家の良心にわずかでも基づいたお言葉ならば、甘んじて受ける<sup>8</sup>」、「もし花城をお責めになりたいのならば、私の作品の階級性を峻厳に批判してくだされば、私は頭を下げて謝意を表すつもりです<sup>9</sup>」と語っている。つまり朴花城は第一に階級性、第二に芸術性を意識して『白花』を書いたのである。芸術性が「沈浮思」や、白花と瑞龍が詠み合った詩、古典小説を思わせるような結末の処理であるとするならば、階級性とはまさに『白花』の主題に関わる部分である。すなわち朴花城は階級意識を持って『白花』を構想し、主人公を高麗時代末期の妓生に設定することにより、権力者の横暴とそれに蹂躪される下層民の生を表現しようとしたのである。妓生白花は支配層の実相を暴露すると同時に、非支配層である弱者の生をも見せることのできる人物なのである<sup>10</sup>。

『白花』に描かれた高麗時代の妓生の実態が果たして正確なものであるかどうかは置き、すでに『春香伝』に馴れ親しんでいる1930年代の読者は、白花というヒロインを何らの違和感なく受け入れることができたであろう。そのような読者を味方に付け、朴花城は『白花』執筆当時の女性の現実を描いていく。その描き方には、朴花城自身の社会や権力に対する批判意識が明確に表現されている。

先ず、女性の地位について問題提起をする。白花の父、林敬範は「男性万能の時代にも、男児を遺すことが人間の罪悪を免れる手立てとは考えなかった<sup>11)</sup>」という人物で、妻を亡くした後にも後妻を取って息子を得ようとはせず、一人娘を大事に育てた。しかし現実はそのようではなかった。「男性万能の時代に」息子を授かることのできない女性の苦悩は並大抵ではなかったはずである。それが媒仏善者をめぐる挿話によって表現されている。ヨサンの妻は媒仏善者に犯されてから墮落してしまうが、元はと言えば子宝祈願に寺を訪れたのである。それが媒仏善者と姦通を繰り返すようになるのは、年の離れたヨサンの後妻となった妻の若さ所以であり、ヨサンも最後は妻を許している。

この挿話の中ではさらに二人の女性が自ら命を絶っている。ヨサンの妻が媒仏善者を刺すために寺を訪れたときに居合わせた役人の娘と嫁で、一人は媒仏善者と、もう一人は別の僧と同衾していた。語り手は媒仏善者も含めた彼らの死について、「原因を考えてみると、ただ一つ所から発生していることに驚かざるを得ない<sup>12)</sup>」としているが、媒仏善者の悪行も、根本的な原因は男子優先の社会にあると言っているように読める。林敬範の教育を受け、「秀出た考えの持ち主」である瑞龍さえも、「男の力なくして女は生きられないという深い観念と因習<sup>13)</sup>」にとらわれて、白花を救い出す旅に出たのである。

次に、人身売買の末に妓生となり、役人の息子に輪姦された草玉の不幸や、王命に背いた白花の危機が象徴するような、女性が金銭で取り引きされ、権力によって蹂躪される社会に対する強い批判意識が読み取れる。

草玉は最初に布50疋で売られた。作家は当時の人身売買の相場を男女別、年齢別に詳しく記載しており、それによれば50疋というのは安値だということである。この価格が根拠のあるものかどうかはわからないが、具体的な数字によって人間が商品化される実態をリアルに表現している。同様の批判は「人間の全ての罪悪と不幸の原因は富と権力と男の横暴にある<sup>14)</sup>」、「男というものは女を一時の暇つぶしや飾り物としか思っていない……権利と財物をふりかざし……男にぶら下がった生き物やモノとしか思っ

ていない<sup>15)</sup>」など随所に見られる。

さらに、下の引用文はやはり女性が権力の犠牲となる現実を訴えているが、「国家と国家の争い」という下りは当時の朝鮮をめぐる世界情勢に対する批判として読むことができるし、「弱く貧しい人々」が女性のみではないことも同時に表現されていて注目に値する。この時期の朴花城は、女性が様々の理由によって「第二夫人」となってしまうことを防ぐためには女性解放が実現されなければならず、それには先ず無産階級の解放が達成されなければならないと考えていた<sup>16)</sup>。『白花』の展開にはまさにそのような思想が反映されているのである。

富貴と権力を得るために個人と個人、国家と国家は争いをやめることを知らない。そのために多くの弱く貧しい人々が踏みこまれる反面、強くて残忍で狡猾な輩が富と貴を独占する。そしてその富力と権力が彼らの酒色を満足させるために利用されるとき、また多くの無実の犠牲者を生み出すのだ。その中でも最も多く踏みこまれるのは婦女だ……<sup>17)</sup>

ムンイル、ムンチル、コサム、それにムンチルの娘はまさに「無実の犠牲者」である。ムンイルはムンチルの娘を土地や金銭と引き換えに、富豪キムの妾に入れることを決心するに至った。しかしこの場面で作家は、「弱く貧しい人々」であるムンイルの心情を下のように描くことによって、ムンイルに対する批判を避けている。

腹を空かしたことがなければどんな天才でも人間の苦しみは理解できない。……衆生を濟度するという者といえども、お膳に肉が載り、背中が暖かければ、何が本当に耐えることのできない苦しみで、人間に必ずなくてはならないものが何なのかをわかるはずがない。道徳とか何とかのすべての観念は胃袋に飯が入ってからの問題なのだから……<sup>18)</sup>。

同様に、キム富豪の息子らを殺したコサムに対しても、善良な役人が以下のような判断を下すことによって、罪が問われない。

殺人まで犯すように仕向けた者は他にいるのです。殺人は二人（コサム、ムンテル＝引用者）の行為ではありません。人を殺そうとする者の手が結局は自らの生命を奪ったのです。したがって死ぬ形式が違うだけで、実際においては自殺と同じです。もしもそれが他殺ならば、彼らは多くの人々の代表者に人間法の判決によって死刑に処されたのです。二人は死刑執行の官吏となったのです<sup>19</sup>。

以上のような「腹を空かしたことがなければどんな天才でも人間の苦しみは理解できない」、「殺人まで犯すように仕向けた者は他にいる」といった表現は、『白花』が階級意識に基づいて書かれたことを明確に語っている。

『白花』では労働者階級である彼らがヒーローとなる。瑞龍に李夢龍を重ねている読者は瑞龍の到着を今か今かと待ち続け、瑞龍が端午の宴席に現れた時点で胸をなで下ろし、瑞龍の勝利を称えたかもしれない。瑞龍はそれほど凛々しく美男である。しかしよく考えてみると、瑞龍は白花救出にあたって直接には何の役割も果たしていない。瑞龍には権力も財力もないばかりか、旅の途中で病気にかかるほど体力もない。実際に白花と草玉、それに瑞龍をも水から救い上げたのはほかならぬヨサンである。ヨサンもまた労働者階級である。だがヨサンは知も併せ持つ人物として初めから設定されていた。その理由がここで明らかになる。ヨサンと瑞龍は知によって共感し、人生を共にする約束を結び、一体となって白花を救ったのである。さらにムンイル、ムンテル、コサムとの連携プレーも見逃すことができない。彼らの団結力が権力に勝利したのである。

このように『白花』は将来を約束した二人の若い男女の悲劇的な別離と再会という、『春香伝』さながらの恋物語を軸に展開されるが、朴花城は明確な階級意識に基づいてこの作品を創作したのであり、読者を知らぬ間にその世界へ引き込もうとした。しかし果たしてそのような作家の意図が成功したのかどうかは連載の成功とはまた別の問題である。

物語にはさらに先がある。彼らはいったん都で官職に就くものの、鄭夢周の死後は東海岸へ

逃れて農民となった後、昇天する。仮に朴花城が日本の植民地統治を高麗時代末期の混乱になぞらえて『白花』を創作したと見るならば、この結末には展望がない<sup>20</sup>。確にかつてのように残虐な地主に苦しめられることもなく、彼らは農業を楽しんでいるように見えるが、現実感はずしく欠如している。しかしここは、作家としての出発に意気込む朴花城が芸術性と思想性に折り合いをつけた結果とみなすべきかもしれない。

### Ⅲ 『白花』の位置づけ

『白花』は歴史小説の形態をとっているが、これまで見てきたように執筆当時の社会に対する朴花城の批判意識や思想が表現されている。この作品はまだ登壇作しか発表していない朴花城が東京留学中に発表のあてもなく書き始めたものであるが、作品中に見られる批判意識や思想は、植民地期に書かれたその後の朴花城の他の作品と驚くほど共通している。女性が金銭で売買される社会に対する問題提起、権力批判、階級意識などは朴花城の植民地期の作品に一貫して見られる主題である。また主題の表現方法においても、『白花』からその後の作品に引き継がれたものを多く発見することができる。いくつか例を挙げる。

「温泉場の春<sup>21</sup>」は、家庭の貧困が原因で旅館に売られ、さらに転売されて老人の妾となった女性をめぐるストーリーである。女性の価格をめぐる旅館の女将と老人の間で丁々発止の遣り取りが繰り広げられる場面は、人身売買の相場まで提示された『白花』の草玉の場合を思い起こさせる。また「プルガサリ<sup>22</sup>」は、金持ちの老人の還暦祝いに息子たちが各界の有力者を大勢招待し、妓生を呼び、贅を尽くしてもてなす様子を風刺的に描くことによって、権力に対する痛烈な批判を表現した作品である。これは『白花』における端午の宴の場面での禍王の酔態を連想させる。禍王は白花の策略にかかって酔いつぶれ、舟遊びのときには寝入ってしまった白花救出の機会を自ら作るという滑稽を演じるのである。さらに、白花救出のさいのヨサンをリーダーとした連携プレーは、「下水道工事<sup>23</sup>」において、労働者の集団ストライキの成

功という形で引き継がれている。作家が重要な役割を担わせた、知と体を併せ持つヨサンの人物設定は、自ら読書を続けて青年会の幹部となり、闘争を率いた経験を持つ「理髪師<sup>24</sup>」の主人公のものでもある。

このように『白花』には、朴花城の植民地期の他の作品の主題、表現方法が詰まっている。当然かもしれないが、初期作『白花』は、作家朴花城の根本を見せてくれる作品である。したがって上で見たような主題の表現方法をさらに詳細に検討することにより、社会に対する問題意識、作家としての意識がどのような変化を見せるのかを探る作業が今後の課題になると思われる。以下では特に注目される作品を二つ取り上げ、『白花』に見られる作家意識との違いについて検討する。

「雪が降っていたあの晩<sup>25</sup>」は1935年に発表された私小説風の短篇であり、検閲による削除箇所が多い、階級的色彩の濃い小説である。この作品によれば、「私」すなわち朴花城は東京留学前、故郷に近い全羅南道靈光で教師をしていた時代に階級意識を持つようになり、作家としての針路が決まったという。それにはきっかけがあった。教師時代の「私」は貧しい家庭の生徒一人に学用品代の援助をして「偉大な慈善家になったような<sup>26</sup>」満足感を得ていた。しかし「私」はある日、その生徒の兄に給料を盗まれてしまう。兄妹の父が朝から空腹のまま荷物運びの仕事に出かけてミスを犯し、それだけの理由で捕えられた。それで兄は父を一刻も早く釈放させたい一心で「私」の留守中に「私」の家へ入り、給料を持って行ったのであった。そうした事情を「私」はその少年からの手紙によって知る。そこには次のように書かれていた。

私は狂ったように駆けずり回り、ついに先生の家に入って先生の大事なお金30円を盗みました。でも先生、私に泥棒をさせたのは私の心ではなく別の奴でした……<sup>27</sup>

これはまさに『白花』において、殺人を犯したムンチルを無罪にした役人の言葉、「殺人まで犯すように仕向けた者は他にいます」と意味において同じである。このことから朴花城

が東京留学前から確かな階級意識を持っていたことがわかる。ただし、『白花』においては殺人を犯させた者が殺された者自身のみであったのに対し、「雪が降っていたあの晩」では泥棒を犯させた者の中に「私」も含まれている。なぜなら「私」はその日、泥棒に入られることを訳もなく予感していたのである。つまり「私」はすでに自分の立場にある種のうしろめたさを感じていた。それで慈善家の真似事をして満足していたが、少年の手紙を読んで初めて「私」はうしろめたさの正体に気付いたのである。それは取りも直さず作家朴花城の社会との関わり方に通じるものである。「雪が降っていたあの晩」を執筆した1935年頃、朴花城は漸く作家として、知識人としての責任をはっきりと感じ取ったのではないかと考えられる。

同じ1935年に朴花城は2つめの長篇小説『北国の黎明<sup>28</sup>』を『朝鮮中央日報』に連載した。

『北国の黎明』は自伝ではないが、自伝『吹雪の運河<sup>29</sup>』と重なる部分も多く、朴花城自身の体験を土台に創作された小説と見てよい。『北国の黎明』は主人公ヒョソンの1925年4月から1934年11月までの10年間<sup>30</sup>を描いている。この10年間は朴花城自身の登壇から、東京留学、結婚、出産、帰国、夫との別居に至るまでの時期に該当する。作家としては小説10余篇を発表し、『白花』もその中に含まれている。

注目されるのは、『白花』においても作品中の時間が白花と瑞龍の別れから再会までの10年間に設定されていることである。つまり朴花城は『白花』を東京留学中に書き始めたため、『白花』の10年間は執筆当時の時間に置き換えた場合、『白花』と『北国の黎明』はほぼ同じ10年間に扱っていることになる。ただし両者とも執筆時を起点として、前者は10年先を見据え、後者は10年間の歩みを辿るという違いがある。したがって両作品を比較してみれば、東京留学時と1935年当時における朴花城の作家意識の違いが明確になると思われる。

『北国の黎明』は主人公ヒョソンが教師生活、女学校生活<sup>31</sup>、東京留学、そして結婚と出産を経て、同志を追って「北国」に向けて旅立つまでを描いている。先に述べたように朴花城自身の体験が土台になっており、時間の進行はほぼ

年譜的事実に従っているが、登場人物や出来事には架空のものが多く含まれ、特に後半へ進むにつれてそれが顕著となる。

ここでは二人の女性人物に注目する。一人はスッキという、家庭の経済事情で25歳も年上の男の後妻にさせられた女性である。彼女は「一日だけでも自由の身となって死ぬ<sup>32</sup>」ことを願って、新たに女学校に入り直すために上京してきた。もう一人は妓生出身のキョンチュエである。彼女は地位と財産に目がくらんだ母によって両班の妾にさせられそうになったところを恋人と逃げ、その恋人が病死したため死んだつもりで妓生をしていた過去がある。その後、妓生をやめて結婚したが、息子を産めないことで虐待された。そのためやはり人生をやり直すべく上京して女学校に入った。東京留学前のヒョスンも彼女たちと親しく付き合い、特にキョンチュエに対しては、妓生をしていたのは自らの過ちではないが決してよいことではないから、「勉強をして立派な人間になり、人々のためになる仕事をする決心<sup>33</sup>」頑張るようにと励ましていた。

この二人のうち、スッキは朴花城の自伝にモデルと思われる人物が僅かに登場するが、キョンチュエに該当する人物は見当たらない。すると朴花城は何か特別な意味を持ってこの二人を創造したように思われる。だがスッキは学費が底をつくと自ら妾になる道を選んで退学し、キョンチュエも卒業することなく、結婚の道を選ぶ。しかもその際にいかなる葛藤も見られず、スッキに至ってはヒョスンが自分のほうから遠ざけている。『白花』と比較した場合、これは少し意外な展開である。

『北国の黎明』が朴花城の年譜的事実と最も異なっているのは結末部分である。ヒョスンは同志愛によって結ばれた夫が転向すると、夫と子どもを残して一人、「憧れだった北の国<sup>34</sup>」へと旅立っていく。ヒョスンにはスッキやキョンチュエ以外にも多くの男女の仲間がおり、最後までヒョスンを引き留めようとするが、聞き入れることはない。そもそも早々と結婚して、安定した生活を送っていた彼らはすでにヒョスンの同志ではなかったのである。

このように『北国の黎明』が描く10年間は、主人公ヒョスンが自らの信念を固め、同志でな

い仲間を切り捨てながら、目標に向かって旅立つまでの過程である。旅立つヒョスンに迷いはなく、「北国の黎明を独占した主人公<sup>35</sup>」としての誇りを見せる。これは『白花』において人物同士が次々と結び付き、最後は団結して権力を倒す結末とは対照的である。

「雪が降っていたあの晩」と『北国の黎明』を通して、少なくとも1935年の時点までに朴花城が作家としての自己を確立していたということがわかる。そもそも『北国の黎明』は知識人を中心とした話であり、『白花』とは視点が違っているのである。『白花』では社会に対する作家の批判意識や思想は表現されながらも、作家の創造した人物たちは復讐や殺人によってしか現状を打開する方法を見出せていない。それは朴花城がまだ作家として立つべき位置を確立していなかったからではないか。

いずれにせよ朴花城の初期作『白花』には、朴花城のその後の作品に見られる社会に対する批判意識や思想の傾向が明確に表れており、朴花城の初期代表作と言っても差し支えない。歴史小説ということもあってかこれまであまり重要視されてこなかったが、今後は『白花』自体の研究はもちろんのこと、その他の作品とのさらに詳細な比較検討が必要である。それにより作家朴花城の新たな側面が見えてくる可能性がある。

## おわりに

朴花城の長篇小説『白花』は、朴花城が東京留学時代から時間をかけて書き続け、帰国後に女性作家として初めて新聞に連載された作品である。したがって朴花城自身にとって大切な作品であるばかりでなく、朝鮮文学史においても本来は注目されるべき作品である。にもかかわらず朴花城の作品傾向とは異なる歴史小説であり、しかも連載7回分を占めるほどの長い詩が挿入されるという稀有な形態をとっているためか、これまで文学史ではおろか、朴花城研究においてもほとんど問題視されてこなかった。しかし今回の研究によって、『白花』には朴花城の植民地期の他の作品に見られるような、社会に対する批判意識や思想の傾向がすでに明確に表れていることが明らかになった。今後は『白



花』自体の研究とともに、その他の作品との詳細な比較検討を進め、朴花城の作家意識の変化の様相をさらに探っていききたいと思う。

## 注

- 1 朴花城『白花』、プルン思想社、ソウル、2007年、p.8。
- 2 朝鮮の古典小説『春香伝』の登場人物。両班家の出身で、自らも科擧に合格して役人となり、妓生春香を悪辣な地方長官のもとから救い、結ばれる。
- 3 朝鮮近代文学の祖、李光洙の長篇小説。1917年に書かれた。日本語訳（波田野節子訳、平凡社、2005年）を参照されたい。
- 4 朴花城『私の生と文学の余録』、ハルラ文化、木浦、2005年、p.252。
- 5 朴花城『白花』（前掲）、p.72。
- 6 徐正子『『白花』の作品構造と歴史意識』、『朴花城文学全集』第1巻、プルン思想社、ソウル、2004年、p.459。
- 7 朴花城「小説『白花』について - 『女人』誌十月号を読んで」、『東光』1932年11月号、p.486。
- 8 同上、p.485。
- 9 同上、p.486。
- 10 徐正子、前掲論文、前掲書、p.455。
- 11 朴花城『白花』（前掲）、p.49。
- 12 同上、p.381。
- 13 同上、p.301。
- 14 同上、p.135。
- 15 同上、p.192。
- 16 朴花城「階級解放が女性解放」、『新女性』1933年2月号、p.21。
- 17 朴花城『白花』（前掲）、p.135。
- 18 同上、p.216。
- 19 同上、p.234。
- 20 徐正子、前掲論文、前掲書、p.460。
- 21 朴花城「温泉場の春」、『中央』1936年6月号。
- 22 朴花城「ブルガサリ」、『新家庭』1936年1月号。
- 23 朴花城「下水道工事」、『東光』1932年5月号。
- 24 朴花城「理髮師」、『新東亜』1935年2月号。
- 25 朴花城「雪が降っていたあの晩」、『新家庭』1935年1～3月号。
- 26 同上、1月号、p.179。
- 27 同上、3月号、p.213。
- 28 朴花城『北国の黎明』、『朝鮮中央日報』1935年4

月1日～12月4日。

- 29 朴花城『吹雪の運河』、『女苑』1963年4月～1964年6月。
- 30 朴花城「進歩層の理想と苦悶を - 『北国の黎明』を書きながら」、『三千里』1935年11月号、p.73。
- 31 朴花城は東京留学にあたり、学制変更によって4年制となっていた淑明女子高等普通学校に再入学し、最終学年を修了した。
- 32 朴花城『北国の黎明』、『朴花城文学全集』（前掲）第2巻、p.173。
- 33 同上、p.211～212。
- 34 同上、p.470。
- 35 同上、p.499。

## 【附記】

本研究は、文部科学省の科学研究費補助（基盤研究B「植民地期朝鮮文学者の日本体験に関する総合的研究」、代表、県立新潟女子短期大学波田野節子）を受けている。